信繁から幸村へ

立松和宏

昨年の大河ドラマは『真田丸』であった。三谷幸喜の脚本の面白さもあり、近年ではもっともヒットしたようだ。事実私も大いに楽しませもらったものである。ドラマが始まるに当たって私が着目していたのは、幸村という名前についてであった。実名は〝信繁〟と知られているのに何故〝幸村〟として世の中に知られているのか？が、かねてからの素朴な疑問であった。

三谷幸喜はこれをどう処理するのか？にとても興味があった。彼が想像以上に鮮やかな演出でこれをさばいていたのに関心させられた。秀頼から大坂城に呼ばれ、蟄居中の九度山村から脱出する際に自ら改名するという設定であった。それも壺の中のいくつかの字から息子・大助に籤のように紙札を引かせるという方法であった。これには意表を突かれたが、よくよく考えればそれもありか！と思えた程で、思わずニヤリとさせられた。

通称〝幸村〟として歴史上知られるようになった物語の背景をもっと知りたくなっていた。それを私なりに以下探ってみたい。

史実からみた〝真田信繁〟の生涯

歴史学者の書籍で述べられているいくつかの史実をまず整理しておきたい。

出生は信濃国小県郡の国衆・真田昌幸の次男として永禄十年(1567)に誕生。但し異説あり。生母は、山之手(寒松院)殿で兄・信幸と同じである。幼名は弁丸、のち通称・源次郎。生年以外は確実な史料が存在する。兄が源三郎というのが面白いが当時にはあったことらしい。

幼少・青年時代には父の命により人質として上杉景勝の元へ出される。次いで父の豊臣秀吉への臣従に伴い上方へ当初人質として出され、大谷吉継の息女を娶る。正確な元服時期は不明だ。諱(いみな)は信繁。父・昌幸が尊敬していたお屋形様武田信玄の弟・典厩と同じである。あやかり頂いたのであろう。文禄三年(1594)秀吉より従五位下という官位、職名〝左衛門左〟を与えられ、これが通称となる。

この時代貴人の実名としての諱は直接呼称することをはばかられたものであ

り、通称で呼ばれたという。史料として発給文書があるが、花押や印判はほとんどが〝信繁〟である。〝幸村〟名の文書も数は少ないが存在しているが、使用されている文言などからみて史料としての信憑性は乏しいとされる。

戦歴として父・昌幸が守る上田城で徳川軍を天正十三年(1585)破った第一次上田合戦に参戦していたかどうかは不明であるとされる。慶長五年(1600)関ヶ原の合戦の前哨戦となった徳川秀忠軍との第二次上田合戦だが、父・昌幸と共に籠城戦を戦い撃破した。二度にわたり徳川を苦しめた昌幸と真田家の盛名は上がったが、信繁の貢献度は不確かである。

関ヶ原の合戦で反徳川となった結果、敗戦後の処分で父・昌幸と共に高野山に追放される。山上の蓮華定院を経て、山麓の九度山村で幕府の監視下に長い蟄居生活を送り、その間、父・昌幸は無念の逝去となる。

慶長十九年(1614)豊臣秀頼の招きを受け、九度山を脱出し多くの浪人たちの傭兵隊長の一人として大坂城に入る。大坂冬の陣では「真田丸」という砦を築き、徳川方に甚大な打撃を与える。翌・慶長二十年(1615)五月の夏の陣では、家康を追い詰めるも奮戦むなしく戦死。

以上確かなことはこの程度でしかなく、生年は不確か、諱は信繁らしいこと。徳川方に大きな打撃を与え、軍師や武将として名が高いが、どこで用兵術を身につけたのか謎である。しかし、真田幸村の名は江戸時代初期からよく知られ、今日に至るまで戦国武将のヒーローとして人気が衰えるどころか、NHK大河ドラマ『真田丸』人気もあずかって益々注目を集めている。

真田幸村という名前の誕生

実名・諱が〝信繁か幸村なのか〟については、古来真偽取り混ぜ諸説がある。『ふたり幸村』という小説では、信繁の影武者の一人が幸村という名で、大坂城入城の際に同行し、いつの間にか幸村の名前の方が知られるようになったのだとしている。三谷幸喜説では、大坂城入城に当たっての自らによる籤引きによる改名であったとしていた。父・昌幸の名前が大きすぎてあまり活躍の場がなかった信繁が、心機一転改名により武将としての活躍を誓う決意の現れだと。幼なじみのきりちゃん(長澤まさみ)に、あんたはこれまで何にもしていませんから！とはっぱをかけられ入城を決意する場面が実によくできていた。

これは一見冗談のように見えるが、必ずしもそうとは言えないのである。足利

六代将軍持氏は籤引きで選ばれたという。籤を引くことは神様の意見を聞くという行為であり、ドラマ『真田丸』の中でも、昌幸が北条につくか上杉につくかを籤引きで決めたシーンを伏線として描いていた。軍師や武将が困った時には神頼みをしたのは決して冗談でも不思議でもないのだ。御神籤というではないか。

また戦国武将の中には、武田信玄、上杉謙信のように何度も改名した人物がいたことも事実であるし、改名後の名前の方がよく知られている例もある。しかし歴史史料に見える「幸村」については、先にみたようにおそらく後世の偽作のようであり、通説としては物語作者による創作であるとされる。

「幸村」の名前が最も早く登場するのは、寛文十二年(1672)の軍記物語『難波戦記』であるという。信繁没後五十七年後の刊行、作者は万年頼方と二階堂行憲という。とすれば、この二人が「幸村」という名前を付けたことになる。この物語が江戸時代を通じて人気を呼び、大坂の陣を題材とした他の『真田三代記』『大坂物語』などといった軍記物語や講談、更には講談本などで幅広く幸村の名前が使われ定着していった。

「幸村」命名の由来

それでは、幸村という名前はどこから発想したのであろうか次に考えてみたい。まず上の「幸」は真田家の通字の一つで父の昌幸から貰ったもの、偏諱といわれるものであろう。兄も信幸を諱としていたが、関ヶ原合戦後の徳川家康への臣従に際して、「幸」を捨て「之」の字に変えさせられている。

定説がないのが下の「村」いう字であり、いくつかの説がある。例えばこうだ。まず、信繁の兄が村松殿と呼ばれていたことからとする説がある。『真田丸』では木村佳乃さんが記憶喪失になる役として演っていました。

次に『難波戦記』の作者が仙台藩に仕えていた信繁の子孫に取材した際に、主君の仙台藩主「綱村」(1659~1719)の一字を入れるよう要請があったとする説もある。しかしこの説は成立し難いところがある。「綱村」公の名は元々は「綱基」であり、改名したのは延宝五年(1678)であり、物語成立六年後のことだからである。この周辺については次項でさらにふれることにしたい。

三番目は妖刀「村正」縁起説である。徳川家に仇なす刀として江戸時代初期から幕末まで人々の間で噂され続けた刀である。曰く、家康の祖父・父のいずれも

この刀で殺されたとか、大坂の陣では家康自身が「信繁」から投げつけられた短刀が「村正」だったとされ、「村正」は徳川家を呪う刀として大名は所持を禁じられたとか。逆に倒幕派の志士達は「村正」の刀を求めたともいう。

「村正」とは室町時代から江戸時代初期にかけて伊勢の桑名に存在した刀工集団の名称、ブランド名である。その切れ味は抜群で実用性に優れているらしいが、見てくれは悪く、華やかさと美しさで知られる「正宗」と違い地味故か国宝指定されたものはないという。

綱村縁起説にしろ村正縁起説にしろ、いずれも幸村人気が先にあり、それに便乗しようとした説であり因果関係が逆だと考えられる。元和偃武以降平和な世の中になった時代に、かつて権力者・家康を敵にまわして奮戦撃破し、一度はあわやというところまで追い詰めた講談や軍記物語のヒーローである「幸村」の人気にあやかって生まれた後付けの説に違いない。

さすがに『真田丸』でも、どこから「村」の字を発想したかまでは描いてはいなかった。有力な通説は存在せず、わからない、というのが実状だろう。案外とごく普通に集落を意味する村落からの引用だったりするのでは？

昌幸・信繁父子が暮らした九度山村から貰ったかも。しかしそれだけでは物足らない思いもするので、古代中世からの人名の中に村の字を用いた武将はいないのか、さらに幸村以降に村を名乗った武士はいなかったのか？をみてみたい。

「村」の字がついた武将達

歴史上もっとも古く「村」の字がついた人物と思えるのは、五世紀から六世紀にかけた古代豪族の大伴金村ではなかろうか？武門で名高い一族であり東国や東北に強い地盤を持っていたとされる。金村は武烈天皇や継体天皇の即位に大いにかかわりがあったとされる。

この金村という名前から村を貰ったと考えられるであろうか？時代が余りにも離れているし、信州・真田氏との血族関係も考えにくいであろう。江戸時代初期に生きた物語作者や信繁がこの名前を知っていたとも思えない。それとも古事記や日本書紀の知識があって、そこから名前を発想したのであろうか？

武士が台頭したとされるのは源平両氏が活躍する平安時代末期からであるが、「村」の字がついた武士としては、平安時代末期の伊達家の遠祖二代・宗村(1173～1251)である。伊達家はもともとは常陸国伊佐郡がルーツとされる。伊達家に

は時代が下がって江戸時代には「村」の字がついた殿様が多く登場するのだが、いずれも信繁いや幸村以降のことである。その始まりがこの人であった。

鎌倉時代には幕府の執権・北条氏に「村」の字の付いた人物がいる。第七代政村(1205～1273)に始まる時村、貞村の三代である。政村は第八代・時宗が成長するまで政権を支えた人といわれている。

鎌倉時代末期から南北朝時代にかけての播磨国には、守護大名に赤松義村、則村(1277～1350)父子がいて、村上源氏の流れという。同じ播磨には室町時代末の戦国大名に織田信長への謀叛で知られる荒木村重(1535～1586)がいる。父は義村、祖父は高村といった。

今年の大河ドラマは「おんな城主直虎」だが、井伊家の家系図には直村という人がいた。生没年不詳とされるが、おそらく十五世紀室町時代の人と思える。ほぼ同時代の公家に中院通村(1588～1653)という人がいた。村上源氏の流れで、反徳川幕府で知られた後水尾天皇の側近であった。幸村の物語作者が反徳川という共感からか、命名のヒントにしたと考えられなくもない

先に見たように、幸村命名説の一つに物語作者による伊達家取材時の「綱村」からの一字取り込み説は事実関係からみて成立しないのが明らかであった。見落としがあったかも知れないが、真田家には「幸村」登場以前には「村」の付く人は見かけなかった。しかし、伊達家の遠祖に宗村がいることを物語作者が知り、命名のヒントにしたとも考えられなくもないがどうであろうか。

幸村・子孫生存伝説

では、物語作者が何故伊達家に取材したのか？信繁の子孫が伊達家に大きく関わっていたからであると思われる伝承があるのだ。信繁の血脈が東北に伝えられていたとする話が当時からあったとされる。

幸村の子孫とされる方の著書『真田幸村の系譜』によれば、信繁には大助の他に大八という次男がいて、大坂の陣の際、信繁は正室・竹林院と五女・阿梅達とともに伊達政宗の有力家臣・片倉小十郎に身柄を託し真田の血脈を残したという。そして詳細は省くが、片倉家・真田家の間で血脈は繋がれ明治維新を乗り越えて今日に至っているという。但し真偽の程は確かではない。

江戸時代、仙台伊達家の歴代の殿様には「村」の字が入った人が何故かたくさんいる。歌舞伎などで有名な伊達騒動の当事者の「綱村」がまず最初だ。幸村との関係を連想しそうになるが、どうも遠祖・宗村に因む改名のようだった。

この綱村の後を継ぎ藩主となったのが「吉村」(1680～1752)で、藩政を建て直した中興の英主ともいわれる人物である。この人の母方の祖父は片倉景長といい、白石城主にして仙台藩の重臣であった。景長は信繁の娘・阿梅の養子である。阿梅は片倉重長に嫁いでおり、この夫婦が大八(改名して守信)の後盾となっており直接的な血の繋がりはないが真田との縁が深い。

綱村・吉村以降、伊達家の一族には「村」が通字となったのか、とても多い。下に「村」の付く例として、久村、重村等、上に付く例として村和、村直、村興、村隆等、片倉家にも村長、村休等がある。この現象の背景には幸村が活躍する軍記物語の隆盛があり、幸村人気にあやかりたいという心理が働いていたとも考えられなくもないのだがどうであろうか。

仙台・真田家の伝承によれば、信繁の息子は大助・大八の他に側室との間に之親、幸信がいたというがこれも真偽の程は不明である。女子も九女までいたとか。九度山村での質素な蟄居生活の割に、或いはだからこそなのか、随分と子沢山だったらしいのだ。

ドラマ『真田丸』放映中の昨年には、山口県周南市に逃れたという信繁の末子「幸晴」の末裔がいたという伝承が、古文書や明治時代に建てられたという幸晴夫妻の石碑の存在とともに記事となっていた。まだ末裔は増えるかも知れない。

戦国最後のヒーロー・幸村伝説の系譜

「幸村」という名前は、軍記物の講談がもとになった『難波戦記』から世にしられるようになった。家康を相手に神出鬼没の天才的な軍師として奮戦する姿が人気を集めたようだ。軍記物の物語を辻講釈師や小屋掛けで講釈師が演じる講談は大衆芸能として江戸時代を通じて盛んであった。元禄年間(1688～1704)成立の、幸隆、昌幸、幸村の三代に幸村の子・大助の真田一族が活躍する『真田三代記』では、秀頼の薩摩落ち、真田十勇士の活躍といった創作も加わりより人気があがり伝説化が進む。

ストーリーの下敷きには、大衆に親しまれ人気があった「西遊記」「三国志」「太平記」等の世界があった。講談の速記から講談本が生まれ、浄瑠璃・歌舞伎の「近江源氏先陣館」「鎌倉三代記」といった作品は、鎌倉時代が舞台とされてはいるが、家康と真田三代との争いを描いているとされ、幸村の英雄伝説が背景にあるのだ。また、講談本は貸本屋という商売の人気商品となってより親しまれもした。

明治末年から大正期にかけて真田人気を不動にしたのが「立川(たてかわ)文庫」シリーズの刊行だった。その復刻本を手にしてみたが、今でいう文庫本的なサイズで意外と豪華な装幀の本であった。出版したのは大阪の立川文明堂といった。書き手は上方講談師・玉田玉秀斎とその仲間達だった。講談速記本と時代小説の間に位置しているとされるが、大正年代に伝説的な一大ブームとなり、貸本屋の全盛期でもあり幅広い読者に読まれた。かつて日本中に講談本が溢れ、娯楽として楽しみ、歴史になじみ、啓発され教養を身につけた時代があったのだ。

寄席や芝居、そして貸本屋という庶民文化は今の時代の底流にもなっているのではなかろうか？ メディアはラジオから映画、テレビ、ゲームやコミック、netと変わってきてはいるが。

時代小説の世界でも真田物は多い。池波正太郎の真田太平記、柴田錬三郎の「真田幸村・真田十勇士」菊地寛、五味康祐、海音寺潮五郎、井上靖 等にもあるし、テレビドラマや映画の原作となり戦後も何度かブームとなってきた。

その底流には大阪人の太閤びいきと家康嫌い、反幕府・反権力の気風がある。江戸時代中期以降、庶民の中には常に幕府権力への不満が鬱屈していて、弱きを助け強きを挫く物語は連綿として大衆の願望に応える物語として人気があるのだ。明治後期から大正昭和にかけての富国強兵政策、軍国化時代にあっても真田物に人気があったのは、個性を圧迫するものへの異議申立て、権力への密かな反抗、勧善懲悪の心、滅びゆくものへの愛惜の念など、があったのだと思える。彼の柴錬はその著書の一節でこう書いている。

「想うに、五味練也斎は、その性情から推測して、天下を制したる覇者徳川家康を嫌悪し、滅亡するとわかりつつも、敗者が最後に示せし武辺の美しさに、惹かれたるものに相違あらず」と。小生も同感するものである。

ネーミングの妙

それにしても、どうしてこれほどまでに〝幸村〟という名前が後世まで喧伝されるのか？ については、今ひとつ釈然としないものがある。真田信繁のままであったならばどうだったろうか？ 違っていたかもしれないという気がするのだ。だとすれば、そこには、幸村(ユキムラ)というネーミング、言葉・漢字の選び方が良かったのからではなかろうか？ と異なる視点から考えてみたい。

信繁(ノブシゲ)という名前は由緒はありそうだが、あまりイメージの湧かない

平凡な名前でしかない。それに対して幸村には、なんだか幸せな村を築いてくれるリーダーのような新鮮なイメージがあるような気がする。

マーケティングの世界では、商品をヒットさせるにはネーミングがとても大事であると言われ続けている。事実ヒット商品には、いつまでも記憶に残る名前の妙がある。あえて実例は避けたいが、秀れたネーミングには条件がある。具体的には①覚えやすい語感・音感、②そのものにふさわしい品格、③ 端的に特徴をズバリ言い当てる形容、④ 想像力に訴えるイメージ喚起、⑤ 夢の持てる願望、があるかが基本とされる。

幸村(ユキムラ)はこれらの条件を見事にクリアしていると思えるがどうであろうか。さらに「村」という漢字に焦点を当ててみたい。『語源大辞典』によれば、「人家が群がっている地域、人がムラガル(群らがる)意からか、朝鮮語のムリはムレ群れと結びつくかどうか」とある。記紀の時代から表記のある古来からの言葉のようである。また語感の面から「音相」を探ってみれば、R、r の音は、舌先を上あごに軽くつけ離す時に出す弾音、日本語で唯一の流音と分類される音とある。r の音相は、「陰を指向しながら軽やかさを持っているため、化粧品や女性商品などに多く使われている」、とある。他の音に埋もれることなく印象に残りやすい音だと納得できるのではなかろうか。幸村という名前は印象に残って覚えやすく、戦国の世を平和な世界に導く印象を与えるいいネーミングなのである。

端に時代を超えて残ったのではなく、そこにはそれなりの理由があったのだと思いたい。「幸村」と名付けた人誰なのか確定出来ないのが残念だが、その人のセンスに敬意を表し、称賛の拍手を送りたい。

可哀想なのは、兄の信之だろう。幸の字は家康に取り上げられ、徳川家に泣く泣く臣従し、父や弟の助命嘆願・陰ながらのサポートに走り回る役回りとなってしまった。次男坊の信繁は、九度山から脱出し、幸村と名を変えてから、大坂城に駆け付け、思う存分暴れ回り、後世に天才軍師、英雄と持ち上げられ今に名を残した。信之と云えば九十過ぎまで長生きしたようであるが、肖像画はリアルに過ぎて颯爽としていない。よくよく運がないというか、損な役回りではないか。

貧乏クジを引いた長男に同情したくなってきた。

主な参考図書

『真田信繁―幸村と呼ばれた男の真実』平山優、『名前の面白事典』野口卓、『小説集・真田幸村』末國善己編、『真田幸村の系譜』真田徹、『大坂城の男たち』高橋圭一、『名前の禁忌習俗』豊田国夫、『ふたり幸村』山田正紀、『音相』『ネーミングの極意』木通隆行、『ぼくらの時代には貸本屋

があった』菊地仁、他 web サイト多数。